

# 肢体不自由特別支援学校の児童生徒を対象とした ICT 活用による遠隔スポーツ指導

和史朗

(東北福祉大学教育学部<sup>1)</sup>)

KEY WORDS: ICT 活用 ゴロ野球 遠隔指導

## I 目的

全国の肢体不自由者を教育する特別支援学校（以下、肢体不自由特別支援学校）の運動部活動・クラブ活動の実施率は、中学部で 18.9%、高等部でも 22.3%にとどまっており、実施されているスポーツも極めて限定的な状況にある（笹川スポーツ財団,2014）。このことから、肢体不自由特別支援学校の児童生徒が取り組めるスポーツの開発は大きな課題である。しかしながら、肢体不自由特別支援学校に在籍する比較的重度の運動障害者を対象としたスポーツの種類や指導者は、いまだ十分とは言えず、重度運動障害者を対象とした効果的かつ効率的なスポーツ指導の方略が求められる。

一方、文部科学書に設置された 2020 年代に向けた教育の情報化に関する懇談会（2016）は、ICT 活用の強みとして、「距離に関わりなく相互に情報の発信・受信のやりとりができ、双方向性を有すること」等のメリットをあげており、今後ますます進歩を遂げるであろう高度情報化社会の中で、ICT を活用した指導は、今後の障害者スポーツ推進のための方略としても十分に期待されるものと考えている。

本研究では、肢体不自由特別支援学校の児童生徒を対象とした ICT 活用による効果的な遠隔スポーツ指導のための方略や留意点について、指導実践を通して検討することを目的とした。

## II 方法

### 1. 実施種目

筆者らは、これまでに肢体不自由特別支援学校の児童生徒を対象として、どのような重度障害があっても、個の障害特性に応じた個別ルールを適用することで、誰もが参加可能なベースボール型アダプテッド・スポーツである「ゴロ野球」の指導に取り組んできた（和, 2011）。ゴロ野球の特長は、打撃や守備や走塁といった野球固有のルールを、障がいのある児童生徒一人一人の心身機能・身体構造や活動制限に応じた個別ルールへと変換し、各々に対して適用することにある（和, 2011）。例えば打撃ルールでは、相手投手が投球するボールを空間的にとらえて打ち返すことが困難な選手に対しては、事前申告によって 2 ストライク後に投手にゴロでの投球を求めることができたり、ティーの上に固定されたボールを打つことも認められる。守備や走塁においても同様に、個人の能力に応じた個別ルールを適用することで、どのような障害のある児童生徒でも参加が可能となる種目である。

### 2. 指導対象チーム

指導対象チームは、北海道 A 支援学校（以下 A 支援学校）の「ゴロ野球」チーム（以下 A チーム）であった。A チームのメンバーは 19 名で、A 支援学校の小学部、中学部、高等部に在籍する 14 名の児童生徒の他、以前は A 支援学校に在籍していたものの、途中で小学校に転校したり、他の高等支援学校や高等学校に進学した 5 名の児童生徒も含まれていた。メンバーの移動手段は、独歩が 5 名、介助付き歩行が 1 名、歩行器利用が 3 名、車椅子自走が 6 名、電動車椅子利用が 4 名であった。ゴロ野球の練習は、毎週 1 回、金曜日の放課後 14 時 30 分から 17 時 15 分まで、A 支援学校の体育館で行っ

た。

### 3. 指導者

筆者は、A 支援学校での勤務経験があり、その当時よりコーチ、監督として A チームの指導を行っていた。また、A 支援学校退職後も近隣大学の教員として、引き続き A チームの監督を務めていた。筆者が東北福祉大学に異動となった 2016 年度も A チームからの要請を受け、監督としてチームの指導をすることとなった。

### 4. 指導方法及び実施期間

毎週金曜日の練習を、東北福祉大学の筆者の研究室の PC と、A 支援学校体育館での練習に参加していた児童生徒の保護者のスマートフォンをインターネット電話サービスである Skype (Microsoft 社提供) のビデオ電話で中継した。筆者は研究室の PC で、A 支援学校の体育館にいる児童生徒や保護者らは、スマートフォンから接続したバックネット裏の大型ディスプレイでお互いの様子を視聴できるようにした。2016 年度の 4 月より、同年度 2 月までの約 11 カ月を本研究における検討の対象期間とした。

## III 結果

対象期間内に遠隔指導を計 27 回行い、現地での直接指導も別に 16 回行った。遠隔指導では、中継される映像を見ながら、投手の投球時の車椅子の向きやテイクバック時の腕や肘の位置や高さ、独歩投手の踏み込み足の方向、投球時の目線などのアドバイスを適宜行った。打者指導でも、必要に応じて各選手にグリップの位置やバットスイングの軌道について、守備でも選手のポジショニング等について具体的にアドバイスすることも可能であった。

## V 考察

今回の指導結果から、肢体不自由特別支援学校の児童生徒を対象とした ICT 活用による効果的な遠隔スポーツ指導のために必要な視点として、以下の点が考えられた。

- ①児童生徒のパフォーマンスに対する中継を通じた即時的かつ確かなフィードバックが大切であること
- ②指導者の指示やフィードバックを明確に伝達するための大型ディスプレイや音声増幅機器等の ICT 環境の整備
- ③指導現場の保護者、支援者、コーチとの日常的な連携協力
- ④遠隔指導を効果的に行うために現地での直接指導を併用すること

## V 文献

和 史朗 (2011) 重度障害者を対象としたアダプテッド・スポーツの取り組みー肢体不自由特別支援学校における野球指導を通してー. 北翔大学北方圏障害スポーツセンター年報, 2, 57-62.

2020 年代に向けた教育の情報化に関する懇談会 (2016) 最終まとめ. 文部科学省.

笹川スポーツ財団 (2014) 文部科学省委託調査『健全者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業（地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究）』報告書.

(NIGI Shiro)